

ニート・ひきこもりと発達障がいについて ～支援のための理解と連携の必要性～

九州産業大学特任教授 川上 範夫

1、関わりということのはじめとして、まずは人間関係作りのスキルにチャレンジしてみましょう。

「構成的エンカウンターグループ」から導く知恵

「相手の心を読み、自分の心を読みに合わせて決定する」というワーク

* あわせアドジャンゲーム

* 心の握手ゲーム

2、関係性の病理としての発達障がい問題の出現について

1)、現代の時代社会としての空気は合理的技術操作モデルに沿った思考に導かれて動いてきている。特に近年のアメリカ中心のグローバル化の動きのもとでは旧来の日本的常識はことごとく打ち破られて技術中心の思考が軸になってきている。こうした変容に伴って人間観、人間関係観の面でも「個の尊重」「個人主義」「プライバシーの尊重」といった考え方がそれほど点検されないまま常識化されてきたきらいがある。

具体的には、合理的科学技術操作主義の流れにのった近年のパソコン、インターネット、ケイタイの席捲、またアメリカ化（グローバル化）のキャンペーンの中で人間の心や人間関係のセンスは細片化されてきて、自己感覚の矮小化を意味する「マニュアル年代」とか「検索年代」と呼ばれる人間像が生まれ育ってきた。

例、マニュアルを見ないと機械を始動しない若者

例、検索で確認しないと安心しない若者

2)、こうした人間関係のセンスの細片化と呼応して、新しい家族関係、人間関係のトラブルが出現してきた。

まず、親子関係や母子の関係も「個人対個人」の図式で考える親や専門家が出現してきた。

子育て、人間関係すべてを技術、「マニュアル」でこなそうとし、正しい子育て知識を「検索」で求めようとする大人が出てきた。

例、赤ちゃんの育ちが平均値より下だといって大騒ぎする親

3)、コミュニティの観点から見ると、核家族化、世代間の断絶、コミュニティーカルチャーの崩壊によって、子どもに対する評価や見方が親自身の個人としての能力、特性に任されるようになってきて、親の偏見、曲解、思いこみといったことがあっても、それが修正されないままに過ぎてしまうことになり、一方で親たちは自信のないまま、迷いながら自分の子どもを見ているといった状況になってきてしまっている。

昨今では、むしろ、こうした親の心情は普通のことになってきてしまっている。

4)、こうしたことの一方で、皮肉にも社会資源の整備ということがあいまって、親たちの専門機関や専門家への依存ということが当たり前になってきてしまった。

例えば、母親教室、育児指導、1歳半検診、3歳児検診、就学指導などへの直接的かつ全面的依存とい

うことが生じてきた。

就学後は学校および先生たちへの全面的依存、ないしは学校および先生たちへの投げ込みが起こってきた。

こうした依存体験によって親たちが自分の見方や評価の手がかりを得て、自信と確信を獲得していく場合はよいが、親たちの多くは、自分で判断するということを積極的に放棄して専門家の眼で子どもを見ることを当たり前と思うようになってきた。

例、「モンスターペアレンツ」「クレイマーペアレンツ」は専門家に託したら安心のはずなのにとこの思いを前提にして不満、不全を指摘してくるものである。

5)、専門家の判定、例えば医師の診断、発達相談指導の専門家の意見をそのまま鵜呑みにして自分たちの判断停止に気がつかないまま、子どもに接していく、ということになるのである。

こうして、子どもとの関係性の切り離しになっていることに気づくことなく、親たちは正しい育児を求めて目の前の子どもの心から知らないままに、気づかないままに離れていくことになっていくのである。

例、子育てについてハウツー的答えを即座に求める親

6)、結果として、親の子育て不安の問題として、親自身の子どもに対する距離感不全の体験、親自身の失感情体験、親自身の抑うつ体験、親自身の共感性不全の体験、親自身の子どもへの離人的関与、ひいては育児放棄、虐待の事態の出現につながってきている。

例、見守れといわれて、ただ、見守り続けた親

例、8ヶ月の子どもがちゃんと意志を伝えてくれない、と怒る親

例、中学生の子どもと暴力で渡り合う母親

7)、子どもの側の心が、親との関係性を実感的に体験できないことになって、しらけ、中空感、離人感、失感情、自己感不全、実存的不安感を抱えることにつながってきた。

現実状況としては、親子がともに互いに共感的に交流することなく、並行的に同居しているだけ、といった感じになることが多くなってきた。いわば、親も子どももそれぞれ孤独感や孤立感を当たり前のよう体験して、生き生きとした直接的交流は遠のいていくということになってきたものである。

例、生活をともにしているだけが家族である証という子ども

8)、現代的な親子関係体験の不全によって子どもの心には「自己不確実感」「自己存在感希薄」「実存実感不全」による問題が出現してきた。

時代社会的な人間関係性の変化、すなわち、個別化、個人化、孤立化、無縁化の流れから発してきた人間関係のバラバラ、スライスの現象の進行が加わって各種の問題行動が顕在化してきている。

* アイソレーション病、自己不確実感病、自己感不全病のさまざま

インターネット依存問題、携帯フェチ問題、バーチャルリアリティー行動化問題（ネット集団自殺ほか）、リストカット問題、（時にはネックカットまで至ることもある。）

摂食に関する不適切行動問題、（やせ願望、拒食、過食）

過呼吸発作・呼吸不全問題、

難治引きこもり問題、ニート（N E E T）問題、（フリーター問題、パラサイトシングル問題もその延長上にある。）、

学校、地域でのいじめ問題、夫婦間暴力問題、恋人間暴力問題、幼児虐待問題、子ども虐待問題、老人虐待問題、行動障害問題（突発性粗暴行為、キレ粗暴行為、逆ギレ粗暴行為）、ストーカー問題、自殺未遂願望問題、自殺企図問題、

解離性人格問題、多重人格様体験問題

例えば、いま風リストカット問題、いま風摂食障害問題のウラには、関係性の断裂感からくる自己感不全の不安感覚と、生きた関係体験希求のニーズが認められる。実際、生き生きとした人間関係を体験することを通して問題事象は減衰していくものである。

引きこもり問題、N E E T問題は、社会との関係性に丸ごとの自分を賭けることがむつかしいと自覚した若者が陥っているアイソレーション病問題、ないしは自己感不全病問題である。

要は、コモンセンスの変遷を理解することを通して現代を生きるわれわれ自身の心の変容を自覚しなければならない。そうした自覚を土台にして、現代の若者、子どもたちの心もようの変容を理解できるようになると考える。

9)、このような人間関係を中心とする関係体験不全から生じると考えられてきている事象に加えて、この20年来、原因を特定できない「発達の遅れ」といった子どもたちの問題が激増してきた。

いわゆる「発達の遅れ」というと「知能」や「認知機能」にハンディキャップを有した子どもや青年を指していたものであった。

少し以前から「認知的能力」にハンディキャップを有していないけれど人間関係、社会関係において明らかに厄介なひずみや行き違いを呈する者が出現してきた。これを「高機能広汎性発達障がい」と呼ぶようになってきた。

高機能広汎性発達障害・・・広汎性発達障害、高機能自閉症、アスペルガー障害、注意欠陥多動性障害（ADHD）、学習障害（この引用部分では医療分野での論文からなので“害”“症”という表記をそのまま使っています。）

* 当然のことながらこうした発達障がいと呼ばれる子ども、大人たちは簡単にアイソレーション状態（孤立）に陥り、いじめの対象になったり、登校困難になったり、ニート引きこもりになったり、人間関係不全になったり、職場不適応になったり、就労不全になったり、社会関係不全になったりするものである。

* 当初は脳の微細損傷、微細な機能障害があるといわれてリタリンなど薬物療法が功を奏するとされてきた。

しかし、現在では、当該の子ども、大人は生活感覚のずれとして「共感能力の不十分、思いやり能力の不十分、場の空気を読むことの不十分」といった性格特徴を有していて、それがゆえに本人も周囲も互いにスムーズに通じ合うことができなくなってしまうといった問題に直面するのである、という理解をされるようになってきている。

当人の資質的な心理行動特徴に加えて、周囲からの行動修整の努力も実効性を示さないまま成長してきたものとするのが妥当ということである。

* この発達障がいと呼ばれる子ども、大人たちも根本的には「関係体験不全」がベースになっているので

はないかと見ることができる。

10)、「関係体験不全」から生じてきている自己感不全反応問題も発達障がい問題も改善のための軸は「意味ある関係性の体験」の供給や充足にある、ということになる。

生活上の改善としては対象の子ども大人に対人関係、社会関係への計画的な参画を促し、不十分な関係能力の充実を図っていくという筋道が考えられる。

専門的関与としては心理臨床的な人格理解のもとでグループ体験の場、共同作業の場、協働生活の場などへの参加を促し、そこで他の人間や対象との生々しい接触とかやり取りを経験しなければならないように采配していくというのがポイントになる。

11)、ここで、「関係体験不全」から起こる子どもの問題発生の理解と比較対照して、オーソドックスな心の問題形成の形として、神経症的構築を行って症状に苦しむ子どもたちの問題も考えておかなければならない。

①親が子どもと関わる際、オーソドックスには親が子どもに共鳴的ないしは共感的に理解することを前提として、親の主導権のもとで子どもの育ちが展開していくものである。すなわち、関係体験不全ではないけれど、親から子どもへの圧倒的優位からの絡みかけによって、子どもの心の歪みが発生してくると考えられるわけである。

親の考えや気持ちに沿って、すなわち親の側の思いこみによって無批判、無反省に子どもの心に関わっていくことによって押さえ込まれた子どもの心では、自分の意思や感情の動きを進んで抑制しようとする試みが日常になってくる。

こうした事態の展開によって子どもの心にひずみが生じてしまう場合、子育てにおける親からの支配性とか侵襲性といった表現が行われるものである。

子どもの心に知らないうちに自分で自覚できないコンプレックスが住みつくことになるのである。

このコンプレックスが子どもの心に不安をもたらし、その不安の処理、すなわち自己の防衛のための方法が適切に発動されない場合、神経症的心理、行動の発生と見なすのである。

②また、より深刻な事態として、表面上は穏やかにうまくいっているように見える親子の間で、無言の駆け引きのもと、実は圧倒的に親の方の力が強く、子どもの側が無自覚なまま従順に自分の心を殺したまま育っていったということがある。

いわば「自分がない」という感覚を日常的に内包しながら、かろうじて社会に対して調和できてきていたといった例である。外から見ると究極の従順の姿勢を示しているのが特徴である。

こうした子どもが強い刺激や圧力を受けて自分のないところへ直面してパニック反応を起こしてしまうのが精神病的構築である。

<神経症、精神病構築型の不適応のさまざま>

一過性現実水準不適応（一時的不調、恐怖症）

神経症的不適応：不安神経症、強迫神経症、ヒステリー、離人神経症、心身症、心気症

抑うつ不適応（反応性抑うつ反応）：心因性抑うつ症、仮面うつ病

人格障害（ボーダーライン）不適応：境界例型～、偏執型～、分裂型～、自己愛型～、反社会型～、演技型～、強迫型～、統合失調型～
精神病的な不適応：躁うつ病、うつ病
統合失調症：妄想幻覚型、緊張型、解体型

12)、改めて振り返ってみよう。

いったいこの時代社会の何が変わり、何がなくなってしまったのか、子どもたちに注がれるものの何が変わり、何が与えられなくなってしまったのか、丁寧に考えていかなければならない。

今や関係体験不全から生じる自己感不全反応は日常的に周囲に見られるようになってきた。

リストカットも摂食障害もバイオレンスも普通に周囲でみられるようになってきた。

同時並行的に・・・

発達障がいがある不登校が多くなってきた。

発達障がいがあるいじめ事象が多くなってきた。

発達障がいがあるニート、引きこもりが多くなってきた。

発達障がいがある非行、反社会的問題行動が多くなってきた。

そこから、われわれが今、取り組まなければならない課題が浮かび上がってくる。

- * 結局、時代社会のコモンセンスの変化が人間関係の変化、家庭の変化、家族関係の変化、子育ての変化、子どもの変化、教育の変化、医療の変化、遊びの変化、心の変化をもたらしてきたことは間違いない。
- * われわれの社会、カルチャーの行方、とりわけ人間関係にかかわるカルチャーが揺れ動いてきているということに思いを向けていかなければならないだろう。

*** 臨床実践論的議論として多面的に考えてみよう。**

3、もともとわれわれを導いてきた人間関係センスと人間関係観

「関係性がアプリアリである」「言わぬが花」「知らぬが仏」「以心伝心」「阿吽の呼吸」というのがわれわれを支え、結び合わせてきたはずである。

「個の原理」以前にも常に西欧世界を導いてきたのは神、信仰の原理であった。神との契約、神との約束は個人が引き受けるものであった。

この考えの延長上で人間関係も体験されてきた。これが輸入されてきたが、しかし、かつては和魂洋才でこなしていたのであった。

そもそも、合理的に考えること、因果的に考えること、言葉で表現すること、人間同士では対等にやり取りすることを当然の倫理にすること、などはすべて一神教の絶対神との関係性をバックにしたものである。

4、洋才と和魂の混乱状況の中でどのような実践的関与の工夫が考えられるか

発達障がいの特徴づける「人間同士の共感力の欠如」、「思いやりを持つ能力の欠如」、「場の空気を読み取ることの困難」が関係性の体験の貧困から起こっているという理解をしなければならない。

実践としては反対に「そこそこ健康に一人でいられる能力」を育てることを課題としなければならない。

(ウニコットの知恵)

親として、大人として「お互い様」「そこそこ、ほどほど」「まあまあ、おしなべてこんなもの」、という感覚で次のようなセンスを大切に育てていくことと考えられる。(日本の人生観の意味)

これらを言いかえるならば、「関係性のセンス」をはぐくむことが課題ということになる。「関係性の体験の場」、というセンスを共有して、「地域を生活する場として」、「学校を学ぶ場として」、「家庭を生きる場として」、互いに共感できるように協同していくことが大切である。

*再度点検するなら、わが国には下のように関係性のセンスを無条件に大切なものとして体験してきた文化の歴史がある。

「以心伝心」「知らぬが仏」「言わぬが花」。「ご縁」「因縁」「赤い糸」「腐れ縁」「茶飲み友達」。「ありがたや」「おかげさま」。「気合」「念力」「祈り」。「辛抱」「なれ」「あきらめ」。「ほどけてくる」「とけてくる」。「ほれる」「ほだされる」「うらめし」。「仏心」「鬼」「鬼神」「夜叉」。

*関係性の体験の尊重は、言い換えれば「魂の教育」「心意気の教育」「いのちの教育」につながる。(河合隼雄)

*いってみればこれらは「知の教育」「理性の教育」になじむものではなくて、「感動の教育」「感性に向けての無条件の教育」でしか達成されないものである。

5、個の原理の世界から関係性の体験をわかりやすく理解しようとする試み

「個の原理」に基づく母子関係観から始めて、なお、「関係性の体験世界」を把握しようとするならば次のようになる。

母親は子どもに対して「妄想」を抱く。子どもも母親に対して「妄想」を抱く。「妄想」と「妄想」が合致すると「共感的関係」ないしは「相互理解」「愛の始まり」になる。

青年期から大人になってもこの能力は必須である。愛は「妄想」、恋は「幻覚」、結婚は「錯覚」、しばらくするとすぐに「脱錯覚」、あとは「我慢」、「辛抱」、「断念」、「あきらめ」、「馴れ」という物語をたどる。言い換えれば、「赤い糸」に引かれて近づき、「ご縁」によって結ばれ、「因縁」と考えて苦労を引き受け、時の推移とともに「腐れ縁」となり、長い時間をお互いが空気のようになるまですごし、いずれ「茶飲み友達」にまで到達して、「おかげさま」「ありがたや」とつぶやいて幸せな中で自然に還っていく、というシナリオが共有されていたはずである

6、関係能力の不足という理解に基づく実践的関与の試み

妄想的共感性をきたえる試み

赤い糸、ご縁、腐れ縁、因縁を体験的に理解する試み

気合を伴ったかかわりの試み

念力の伴ったかかわりの試み

我慢、辛抱、あきらめをスムーズに受け入れることができる能力をはぐくむための実践的関与の試み

思いやりを持つことのできる能力を根付かせるための実践的関与の試み

一人でいられることのできる能力を根付かせるための実践的関与の試み